

# 多摩デポ通信 第39号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2016年8月6日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail [depo\\_tama@yahoo.co.jp](mailto:depo_tama@yahoo.co.jp)

多摩地域の館長会で

TAMALASご案内の

機会をいただきました

理事長 座間直壮

7月20日に行なわれた東京都町村立図書館長協議会の定例会終了後、集まっていた多摩地域の館長さん方に、TAMALAS(多摩地域公共図書館蔵書確認システム)のご案内をさせていただきました。会議室の使用終了時間が迫っていたので、残念ながら用意していた検索の実演はできませんでしたが、資料をお配りし、まずは自館で体験してもらおうことをお願いしました。

共同保存検討プロジェクト担当の館長からも補足で体験を語ってもらいました。また「自分の市では既に除籍手順にTAMALASでのチェックを加えている」という発言もあり、「職員から他館の選書状況がわかるので参考になると言われている」との話も披露されました。他に、「都立の統合検索との差が大きなメリット」という評価も出されました。因みにこの日にお聞きした時点で、TAMALASを体験済みの館長は全体の4分の1程度でした。

この日はやれなかつた実演を、今後はブロック毎に行

## 第26回 多摩デポ講座

# 『国立国会図書館の蔵書デジタル化計画と まちの図書館、読書の未来』

講師：徳原 直子氏

(国立国会図書館電子情報部電子情報企画課)

8月30日(火) 午後6時45分～8時30分

国分寺労政会館 3階第2会議室 JR国分寺駅・南口 徒歩5分

参加費：無料

会員でなくてもどなたでも参加いただけます

「資料デジタル化基本計画 2016-2020」によれば、今後5年間で、1980年代までの刊行図書、刊行後5年以上経過した雑誌などは蔵書デジタル化の対象となるそうです。

3年前始まった「図書館向けデジタル化資料送信サービス」による絶版等資料の提供は、現在、全国の図書館にどこまで普及しているでしょう。

国立国会図書館の方に、蔵書デジタル化の現状や見通しを伺います。可能性を想像しながら、今後も私たちが市町村の図書館に期待すること、現物保存の意味、未来の読書についてなど、一緒に考えてみませんか。

なつていきたいという提案にも理解を示していただき、今後、各ブロックの状況を伺いながら行なつていきたいと考えています。

会議終了後の慌ただしい時間にもかかわらず、皆さんが私の話を熱心に聞かれていたことに感謝申し上げます。これでも館長会の前任役員のご尽力と新役員の方々のご理解の賜物と思います。また、多摩デポの活動を見守ってください。つしやるからのことだと思いました。今後も館長会との連携をより一層強く保ち、協力体制を堅持し続けていきたいと思えます。ありがとうございました。



多摩デポ講座に  
おいでください

8月30日開催

3年前に、多摩デポ2013年度総会と総会記念講演会を開催しました。この時の講演では、南亮一氏(国立国会図書館を講師に、「国立国会図書館の新たな動きとデータベース活用」と題したお話をいただきました。

この時既に同館は1968年以前の蔵書デジタル化を済ませ、館内で閲覧ができました。そしてこのデジタル化資料(そのうちの入手困難な資料だけが)を、翌年から全国の図書館へ配信可能にする新サービス(「図書館向けデジタル化資料送信サービス」事業)の準備が進められていたのです。その具体的内容や準備状況を知りたい、受け手側のまちなかの図書館はどう備えたらよいか、何が変わっていくのか、というのが私たちの関心で

した。

当時の講演会報告から参加者の声を読むと「この配信読書は、現在の図書館にあるインターネット開放端末の併用では無理ではないだろうか。古い本をもっと長時間それぞれの手に、端末で読んでもらえる台数と環境が必要」「1968年以後の図書を自治体図書館が自前の保存蔵書と相互協力で現物提供できれば、(国立国会図書館の収書率の問題はあるにせよ)、全国の公立図書館で過去の出版物の内容に(雑誌でなく)図書のみだが)、アクセスできる体制ができていく。素晴らしいことではないか」「公立図書館での蔵書の保存の課題は、決して際限のない議論ではない」「過去数十年レベルのスペンで考えれば、各図書館の現物図書の収集・保存・相互貸借の機能、役割とその大事さは、位置がはっきりしてくるのではなか」「等の意見があったこと

がわかります。

その後も国立国会図書館はサービス向上をはかり、2015年に「近代デジタルライブラリー」を「国立国会図書館デジタルコレクション」と統合。「貴重書画像データベース」なども含め、インターネットで資料画像を見られるサービスが一括して利用できるようになりました。デジタル化の際に目次情報がテキスト化されているため、目次に含まれる言葉からも検索ができて、大変便利です。

いまや国立国会図書館の蔵書の約250万点がデジタル化され提供されています。また今年3月に発表された「資料デジタル化基本計画2016-2020」によれば、今後5年間に、1980年代までの刊行図書、刊行後5年以上経過した雑誌、その他古籍資料、録音・映像資料などがデジタル化対象となります。目次情報のテキス

トデータ作成、メタデータの充実、官庁出版物・非商用学術出版物の本文検索を目的とした本文テキストのデータ化なども行われ、検索が1層便利になって、求める著作や情報を含む過去の出版物を見つけやすくなります。しかしその一方、デジタル化した原資料の印刷物は、保存のために提供されなくなっています。

さて、では3年たった「図書館向けデジタル化資料送信サービス」はどこまで普及しているでしょうか？ 利用の手応えは？ その普及・進捗状況を教えてもらい、3月に発表された新たな計画の詳細とその先の方向を伺いたいと思います。どこまでのことがカバーされていくのでしょうか。

国立国会図書館のデジタル化が進んでも、著作権保護期間内の資料は、頻繁に国立国会図書館に足を運べるわけでもなく、私たちはこれか

らも身近な図書館を頼らざるをえません。また、官庁出版物のデジタル化と云うけれど、国立国会図書館に納本されていない市町村刊行物も多いのでは？

多摩デポは、利用のための資料保存を目指してきました。国立国会図書館が原資料を保存する中、原資料を利用に供し続ける仕組みを考えてきたのだ、とも言えます。私たちの地域に共同保存図書館が作れたら、よりよい読書の未来に向けて、国立国会図書館と協力できることは何でしょうか。

国立国会図書館の蔵書デジタル化が進む中、資料アクセスと読書の未来について、そして今後も「まちの図書館」に期待しなければならぬことについて、一緒に考えてみませんか。



## 年度総会と講演会を開催

5月29日、国分寺労政会館で2016年度通常総会を開催しました。正会員数<sup>93</sup>のところ、出席<sup>17</sup>、委任状<sup>43</sup>、計<sup>60</sup>で総会は成立しました。事前に会員に送付してあった議案書にそって審議、採決を行い、第1号から第5号までの議案は提案通り、可決成立しました。

理事長からは、「共同研究による、『多摩地域公共図書館蔵書検索システム』を公開できた。今後も改良を重ねていくが、図書館現場で、多摩地域で希少なタイトルを残すためにぜひ活用してもらいたいと考えている。」

館長協議会の共同利用図書館検討プロジェクトの研究に協力する。リアルな共同保存図書館の実現はまだ見えないが、新都立多摩図書館が長期的視点に立った広域図書館行政を進めるよう、要望・提言を続けていく」と挨拶がありました。

会員の方には既に総会報告はお送りしました。

総会終了後、県立図書館が資料保存センターを作って、県内市町村の図書館とともに共同保存をすすめている滋賀県立図書館から、館長の國松完二氏を招き講演会を行いました。

参加された、大澤正雄さんに執筆していただきました。



## 久しぶりに 「本当」の図書館長の 話を聞いた思い

大澤正雄（会員）

多摩デポの勉強会で滋賀県立図書館長の國松完二氏の講演を聞いた。私は久しぶりに「本当」の館長の話を聞いた思いだった。

現在県立の館長で司書は國松氏一人になってしまった。昨年までは埼玉の乙骨氏が熊谷の館長だったが、今年3月で退職されたという。

長年、滋賀県立の図書館員として磨いてきた仕事をとおして、國松氏の図書館観と県立図書館での蔵書構成・資料保存の考え方を伺った。

### 滋賀県の最近の動き

冒頭に、滋賀県の最近の動きを紹介された。その中で、かつては求められた資料が県内で調達出来ずに苦労し

たが、最近では市町村の図書館も整備され、県立もそれなりに蔵書を持つようになってきたので県内で県民の要求に応えられるようになってきた。しかしその結果、若い図書館員たちは自分のところがない資料を他県から求めることに疎くなってきた、というお話をされた。

市町村長や議員も若返ってきたので、図書館に対する理解は持つようになってきたが、一方で自分たちの成績をあげるためか、民営化志向が進んできている。今は、市

町村19館、県立1館で図書館協議会が機能して、お互いに協力しているので、民営化の話が出ても押さえている。県立の館長は5自治体の図書館協議会に委員として参加している、という。

県立図書館の建物は1980（昭和55）年に出来たので、既に36年を経ている。また市町村の図書館も建替え問題が出てきている、という。

### 保存センターとしての 県立の役割

図書館が出来た時、書庫は50万冊収容可能だったが蔵書は移動図書館用が多く、館内用図書は実質15〜16万冊分しかなかった。前川さんが来て移動図書館をやめて、県内図書館の振興策をつくり、図書費の補助金を県が市町村に出すようにして、年間1、2万冊増やすようにしていき、県立も蔵書を増やさなければならぬとした。10年く

らいで50万書庫は満杯になって増築することになり、1991（平成3）年に地下書庫が出来た。県立は、市町村立がいらない本を全て保存する「ゴミ置き場」となった、と言われた。

当時（80年代末から90年代初め）の図書館づくりでは開架を大きく取って保存の書庫は小さくする指導が行われ、市町村立図書館はみな書庫が小さく5万冊規模の施設が多かった。面積も1500〜2000㎡くらいで、開架しばらくするとすぐに書庫が一杯になった。議員や当局から、書庫が一杯ならもう買わなくても良いのでは、という声があがった。

市議会では図書館長が答弁する。捨てたらもったいない、県立が引き取ってくれる。利用の低い本などは県立が引き取ってくれるので充分大丈夫という答弁をしていたという。



1992(平成4)年、滋賀県公共図書館協議会で「滋賀県資料保存センター運用について」の合意を得ることが出来た。

市町村から移管した本は県立の蔵書として再利用する。送られてくる本が県立にあるかどうかをチェックして受入れる。MARCのあるものはそれを使って受入れ、ないものはMARCを委託でつくってもらおう。例えば、ガイドブックなどは残すべきか廃棄すべきかなどの議論があったが、除籍リストに入れてもらって、県立で必要なものはもらうようになった。また、ないものはテキストデータと突合してリクエストするようにした。

### 雑誌について

県立では一般雑誌はあまり買っていない。市町村で収集しているタイトル数が多く、保存期限が切れると県立

に送ってくる。県の公共図書館協議会で検討して、200タイトルの雑誌を県が保存する。「移管雑誌マニュアル2014」を作り、残すべき雑誌を市立10タイトル町村立5タイトルとして県立に送ってもらうが、排架は市町村の職員が自分の館の分をやるようにした。研修会や会議などで県立図書館に来た時に自分の市町村の雑誌を排架整理してもらうことにしている。

市町村で一定年限(3年保存とか5年保存とか)で除籍する雑誌を対象に保存雑誌の絞り込みを行い最終的に207誌に決定した。

受入れた雑誌は、最初はラベルを張り替えていたが、市町村のラベルの上に県立のラベルを貼って、雑誌は、新聞・雑誌データベースを使うことになった。

保存が何かということが若い図書館員には理解されていない。最近、市町村の図

書館で「図書館まつり」などが行われ、雑誌や本の交換会や販売をやっている。特に料理やファッション雑誌が人気なので、図書館員が県立に回すよりも交換会に出してしまう。特にファッション雑誌などは数十年前のファッションはどうだったかを調べるのに重要な資料なのだが、そのことが理解されてない。保存することはいくらでも必要があると思う。また、雑誌の資料としての重要性が認識されていない。

特に関西は保存年限が短い、ファッション雑誌は古くなると価値が出てくることがかかっている。

図書館、特に県立は雑誌の保存に力を入れなくてはならない。

### 資料構成とスペースの問題

滋賀県立図書館の資料費

は現在5千万円弱だがピーク時は1億5千万円ほどあった。県立の1970〜80年代は資料のカバー率が悪かったため、他県各地の市町村に助けをもらった。主に小説類が多かった。これは当時の職員の悩みだった。大阪府や埼玉県から随分と借りた。1970年代の小説を約7000冊、大阪府松原市からいただいたのが、今でもよく利用されている。この頃の小説など今は何処もおいていないが、県立くらいは持っているければならない。

これからは市町村からの資料が大量に入ってくる。県立図書館は人員、資料費などをどうするかが問題。

現在の書庫を可動式書架にすれば300万冊は入る。最終的には一県でどこまで保存するか、雑誌など、特に学術雑誌などは何処まで残すかが課題である。また、昔だったら書庫を増設すればいいといっていたが、低成長

の現在は今の施設をどうやって使っていくかである。

滋賀県は市町村の図書館には大きな建物がないので、分担をどう出来るかが課題。多摩デポのような資料保存センターの仕事を市町村と一緒にやっていくことに意義があると思っている。

### 【質問】

▼Q 市町村からの雑誌を貸出す時はバーコードを隠すのか、どうやって貸出しているのか。

▼A バーコードを付けたカバーにくるんで貸出している。



## TAMALASの公開

(株)カーリルとの  
共同研究報告 その7

多摩デポは、今年5月の通常総会を期に、多摩29自治体の図書館の蔵書を横断して検索できるシステム「多摩地域公共図書館蔵書確認システム」(通称TAMALAS)を読み・タマラス||TAMALAS地域でLASTとなる本の意)を多摩デポのウェブサイトで公開しました。検索対象はISBNが付与されている資料に限られますが、カーリルが提供するAPIとReact (Facebook社が提供するオープンソースフレームワーク)を組み合わせることにより、従来と比べて検索にストレスを感じないシステムを実現しています。ぜひ各図書館で除籍と保存の判断に活用してもらえれば良いと考えています。

先日、ある図書館の協力で、



除籍候補となった資料を実際にこのシステムにかけて連続処理を行いました。この作業シミュレーションにおいても動作は良好でした。シミュレーションもふまえ、図書館が、千冊以上になるような大量の除籍候補を一括で所蔵確認できるツールの開発も同時に進めています。

この間、TAMALASの精度を、東京都立図書館が運

と照合することによって検証してきました。今のところ検索結果の精度に関する課題が三点ほど見つかっています。

(1) ISBN 10桁と13桁の違いによるチェックデジットの扱いが図書館システムによって異なること(図書館によっては13桁のISBNとして格納しているケースがあり、これをそのまま検索した場合には誤った結果となってしまう)。

(2) 各図書館の所蔵検索システムがシステムメンテナンス等で停止していることもあるので、完全な検索結果が担保されないこと。

(3) 各自治体の図書館が格納しているISBNデータに不備があること。

このうち(1)は、チェックデジットの扱いによる検索結果の違いをTAMALAS側で吸収する仕組みを

付加することで解決できました。(2)は、図書館システムが稼働していない場合にはそのことを表示して注意を促すことを考えています。(3)は、検索結果の正確さを高めるためには各図書館が格納するデータの精度を高める必要があります。ISBNの不備やISBNを取り込む時の各図書館システムとの相性について、継続的に検証していく必要があります。各図書館との協力・調整も大事であると考えています。微調整は続きますが、現段階のTAMALASの普及、活用の促しが今年度の課題です。

そして一方、現在は、ISBNの付与されていない資料について検索する仕組みの研究に入っています。

ISBNによる所蔵確認では、高速に同定処理を実行して自動化することを目指してきましたが、ISBNが付与されていない資料では

確実な同定は困難です。このため自動化ではなく、同定作業の効率化を指向したツールを試作していく予定です。除籍候補の資料に対して、各図書館や国立国会図書館の書誌情報から類似する書誌を提示することで、同定作業を効率化できないかを模索しています。

これらのデータを蓄積することにより「バーチャル・共同保存図書館」実現に向けてさらに一歩前進することができると考えています。

研究成果を、国立国会図書館が発行するメールマガジン『カレントアウェアネスE』に発表しました。

No.308 2016.07.28

「多摩デポとカーリルの共同研究成果：TAMALASの公開」(CA-E1824)

## アナトリア便り

暑中お見舞い申し上げます。

トルコへは、予定通り、20日に成田を出発して、21日の午後、無事にアナトリア考古研究所(カマン)に到着しました。

この研究所は、アンカラから南東へ約100km、標高1200mほどの高原に位置し、夏は4度を超すこともありませんが、夜は寒い位の気温で、日中も木陰は涼しく、図書館の中も天然の冷房が効いているようで、快適な環境の中で仕事が出来ます。翌日から早速、図書館の仕事の準備にかかり、たまたまいた新着図書の整理を始めました。仕事内容は、図書、雑誌の受入、目録データベース作成、図書ラベルの添付、破損本の簡易修理、配架作業等、図書整理全般です。すべて一人での作業なので、大変かもしれませんが、

自分のペースで仕事が出来るので、かえって気が楽です。仕事はまだ始まったばかりで、本調子とは言えませんが、体調をくずすことのないように、少しずつ仕事に励みたいと思います。

なお、この研究所の様子は、ホームページ(アナトリア考古研究所)で最新の状況が解りますので、ご覧いただければ幸いです。

7月24日(日)  
カマンにて 麓常夫

会員の麓常夫さんは、三鷹市にある中近東文化センター付属三笠宮記念図書館でボランティアとして資料整理に携わっておられました。2011年からは、毎年夏、トルコにあるアナトリア考古研究所図書館での資料整理にも行かれています。今年も、このクエーダー騒ぎが一段落したところで出かけられました。

## 西東京市の依頼で 除籍候補資料の他市所蔵 調査をしました

依頼された他市所蔵調査の件数は全部で7200件余り。そのうち「ISBNのある資料」は、TAMALASでの一括検索をカールに依頼し、「ISBNのない資料」については、多摩デポが東京都の統合検索を使って人力で調査を行いました。その件数は1019件。期限は7月中をメドということで、まずはボランティアの依頼から。時間的な余裕がありませんこと、書名等からの検索で同定が難しいものも多いと思われるので、事務局およびこれまで参加していたいただいた経験者の方を中心にお願いしました。

今後のTAMALASによる「ISBNのない図書」検索システムの開発の基礎資料とするため、書名による同定の問題点の洗い出しも今回の目的の一つです。

そのため、100件〜200件ごとにデータを切り分け、同一部分を二人で検索してもらうことにしました。

また、今回はこれまでの1・2自治体のみ所蔵自治体名を書くのではなく、念のため5自治体までは所蔵自治体名を記入してもらいました。さらに都立図書館の所蔵調査も併せて行いました（7月20日以降、都立多摩図書館の所蔵資料が検索できないことになり、都立所蔵の確定は来年1月以降に持ち越しになりました）。

出版年等の微妙なデータの違いをどこまで同じものと見なしてよいか悩みます。それぞれの図書館データの作られ方の問題などもあり、課題は多いと感じています。

西東京市に調査結果を返すとともに、問題点の整理を行い、結果を今後の研究につなげたいと考えています。



## 「よみうりたま手箱」に 連載コラム開始

『読売新聞』多摩版に「よみうりたま手箱」というコラム欄があります。3月からこの欄に月一回程度、事務局員を中心に図書館にまつわるコラムの執筆を始めました。

既発表分は以下の通りです。

- ▼3月2日（水）  
「蔵書検索はタイムマシン」  
（堀渡）
- ▼4月13日（水）  
「図書館に聞いてみよう」  
（田中ヒロ）
- ▼5月25日（水）  
「震災後 多様な地図利用」  
（養田明子）
- ▼6月15日（水）  
「移動図書館 役割は続く」  
（手嶋孝典）

7月の掲載は、選挙や高校野球記事で中断。なお会員には、これまで分のコピーを「町田の図書館活動をすすめる会」会報『智恵の樹』巻頭言と、あわせて同封します。

## ★会の現状

2016年8月1日

現在

### ●会員

（個人会員 91名）  
（団体会員 3団体）

### ●賛助会員

（個人 40名）  
（団体 1団体）

会の活動はみなさまの  
会費・ご寄付により支えら  
れています。新年度会費が  
まだの方は、納入をよろし  
くお願いします。

### ●年会費

正会員（個人・団体）  
五千元  
賛助会員一口 二千元  
（個人一口団体五口以上）